

牛久町の推移

牛久町は現在、世帯数12,000戸、人口44,500人である。これは県内の町村では第1位、全国でも第14位(昭和56年3月末現在)。今でも年間3,000人前後と増加の一途をたどっている。このままの情勢で行くと、昭和59年当初には50,000人、昭和60年の国勢調査では55,000人前後になると推定している。そして昭和61年には市制施行となるであろう。昭和30年牛久町合併当時は2,915世帯、15,627人であったが、現在はその3倍弱の人口となった。

当町が何故これほどの人口増となったかを簡単に説明します。

昭和30年代は農業を主とした緑の多い田園地帯であった。

昭和40年代になると高度成長により、家庭の生活にも余裕が見られるようになって、衣、食が満たされてくると、次に住居に関心を持ち始めた。また常磐線が汽車から電車で替わり、上野迄の通勤が1時間で行けるようになった。当町は東京近辺にくらべて地価が安かった。このようにいろいろな条件が重なり、この頃から東京の大手不動産会社が当町に目をつけて、宅地開発のため続々と山林、田、畑に小規模団地の建設が始まった。役場としても無秩序に乱開発されては、理想的な町作りは不可能となるので、都市計画法等により規制をする一方、町指導による区画整理組合の宅地を駅から徒歩で行ける場所に2ヶ所144haを完成させた(昭和54年)。

転入者は東京、千葉、埼玉、神奈川から主に20代後半より40代前半迄の年齢者で、その子供は中学生以下が多く、町としては学校等の増築に追われ、昭和50年以降に幼稚園2、保育所3、小学校4、中学校2が建設されたが、まだ不足している状態である。

さて統計担当者として過去を振り返って見ると、昭和30年代迄は統計調査員は集落の中の事情に詳しい人が選ばれることが多く、集落の全員の動向をよく知っている。このため調査員が、各家庭に行っても調査に協力的でよき時代であった。

昭和40年代は新住民が徐々に増加し、調査に行っても共働きの家庭があり、昼間は留守が多く何度も足を運ばなくてはならず、面会出来ても面倒くさい顔をされるようになった。

昭和50年代になると調査は一層困難になった。新住民は

自分に直接の利益にならないこと以外には、協力しないように見受けられる。抽出調査の場合は、「どうして自分の家が当たるとか、他の家をやってくれ。」と、断わる家が出てきた。

昭和55年の国勢調査の時は、統計係は毎日苦情の電話の応対に苦心した。その内容は、

- 何故、国勢調査をやるのか、非常に面倒だ、調査票を書きたくない。
- 何故、あのおしゃべりな人を調査員にしたのか、調査員を代えなければ協力しない。この場合は個人的に仲が悪い人が多い。
- 同じ行政区の中から調査員を出すな、別の区の人を調査員にしろ、調査員に個人の秘密がわかってしまうと考えているようだ。
- 密封用封筒を全家庭に配布しろ。誰が使用したか調査員にわからないようにするため。

これに対し、統計係が説明し調査の協力を頼むのですが、相手にはなかなか理解してもらえず困りました。また団地を受持った調査員は、相手に文句を言われて嫌気がさし、調査員をやめると言うのを引き止めたり、忙しい毎日でした。

昭和60年の国勢調査の時は、調査員の選出の方法を変えてみたいと思います。それは団地等の新住民の居る地域は別の行政区の全然顔も知らない調査員にやっていただき、旧集落地域はその集落の中の調査員にやっていただく方法がよいと思いますが、その調査員になる人を探するのがむずかしい状況になりましたので、これからは優秀な調査員の確保と調査拒否者を根気よく説得し少しでも非協力者を無くするようにしたい。

このように、のどかな農村地帯から自然環境を破壊しながら、都市化する一方で、住民の調査に対する意識も次第に変化している。

統計調査も非常に困難な仕事となりつつありますが、時代の流れに順応出来るように研さんを積んで統計資料の充実のために、統計係と統計調査員が一致協力、努力して行きたいと思っています。

(牛久町総務部企画財政課統計係長・安達 勲)